

IN THE ACADEMIC CONTEXT OF THE CLASH AND DIALOGUE OF CIVILIZATIONS: THE RELATIONS AMONG JAPAN, CHINA AND CENTRAL ASIAN ISLAMIC COUNTRIES CULTURES



<https://doi.org/10.5281/zenodo.15570426>

志宝 ありむとふて Alimtohte SHIHO

PhD, Center for Northeast Asian Studies
Tohoku University
Assistant Professor

Abstract. *Mainly from two specific topics “Comparing Confucianism in Song and Ming Dynasty and Islamic Philosophy” and “A Study on the History of Comparative Confucianism between Japan and China”, Study the cultural exchange relations between Japan, China, and Central Asian Islamic countries. One of the topics, the Muslim Confucian Philosophy: Islamic-Confucian Dialogue and the Integration of Civilizations. At the end of the Ming Dynasty and at the beginning of the Qing Dynasty, a new theory of learning was created—Muslim Confucian Study (Chinese Islamic Philosophy)—on the basis of Islamic philosophy and under the influence of Confucianism. Wang Daiyu (1570-1660) and Liu Zhi (1660-1739) were two great Hui (Muslim Confucian) scholars at that time. They published Zhengjiao zhenquan (The real commentary on the tire teaching), Tianfang xingli (Nature and principle in Islam) major books. Their approach is distinguished from that of other Muslim scholars in that they addressed the basic articles of Islamic thought with Confucian terminology and categories. The study deals with the Islamic worldview, and with the practices that make it possible for people to bring themselves into conformity with that worldview. However, the teaching of the Muslim Confucian was continuous with those of Mainstream Islam. By studying this, we can gain another perspective on the cultural exchange relationship between Islamic countries such as Central Asia and East Asian countries in the Confucian sphere such as China and Japan.*

Keywords: Central Asia, China, Japan, cultural exchange, Confucianism, Islamic Philosophy

—

アメリカの有名な国際政治理論家であるサミュエル・フィリップス・ハンティントン（一九二七－二〇〇八） 英文名 Samuel P. Huntington は一九三三年に『文明衝突』などの文章を発表し、その後関係する理論として影響が大きい『文明の衝突と世界秩序の再建』を発表し、三九の言語に訳され、世界に衝撃を巻き起こした。その後「九・一一」事件により世間はもう一度フィリップスの理論に立ち返らざるを得なくなる。フィリップスの四つ主なアイデアがあって、その一つは、異文化間や異文明間の衝突は、主に現在七種類の文明衝突があり、イスラーム文明と儒教家文明は共同して西洋文明の脅威に対して挑戦し続けているという点などが挙げられる。未来の不安定さの主要な原因と戦争の可能性は、イスラームの復興と東アジア社会の特に中国に起因している点にあり、

西洋とこれらの挑戦的な文明の関係は非常に難しく、その中で最も危険であると考えられるのがアメリカとの関係であるという点である。「文明の対話」を提唱している研究者はフィリップスの観点を批判し、「文明衝突」は決して現代文明の発展経緯が原因ではないとしている。現在われわれは二一世紀に生活しており、各種異なる民族、文明体系の間でのコミュニケーション、交流をしなければならないため、ある種のグローバルな東方文明と西洋文明ともいえる「文明対話」が形成されている。例えば東南アジアや南アジア地区のヒンドゥー教、イスラーム教、ジャイナ教、中国の儒教、道教、マハヤナ仏教徒、中東地区のユダヤ教、西洋のキリスト教などが挙げられ、広範な対話が行われている。筆者の研究も文明の衝突と対話という学術背景の影響で、学術的・社会的に重要な意義を有する東アジアとイスラーム文明圏（特に儒学とイスラーム学問）の宗教、哲学、社会、政治、環境等の分野について学際的に研究を進め、この地域を総合的に把握するとともに、重要課題について多角的視野から解明を目指すという研究に取り込んでいた。筆者の研究では、日中儒学の相互関係だけでなく、イスラーム思想・文化の東アジア文化圏での展開にも及ぶユニークなものとする。そして複数の文化圏において支配的な文化が、周辺の文化圏においてはどのように個性的な文化発展を遂げるか。つまり、中心に位置する「中華文明」が全漢字文明の源泉であるかのような文明理解を相対化し、周縁文化の独自性を明らかにする。具体的に、イスラームと東アジア文明圏（特に「イスラーム学」「回儒学（イスラーム儒学）」「宋明理学」「江戸儒学」の四分野）の宗教、哲学、社会、政治、環境等の分野について学際的・総合的に研究を進める。研究方法として、それが単に二次資料に基づく表層的なものではなく、それぞれの思想潮流を代表する学者や思想家の著述により実証的に裏づけをしていく。第一段階の目標として：「イスラーム哲学」と「回儒学」；「回儒学」と「宋明理学」；「宋明理学」と「江戸儒学」間の関係及び比較研究を行った。

二

「回儒学」については、明清王朝時代はムスリム共同体が数百年かけて本土化した時期であり、その意識及び文化思想発展のカギとなる時期であるといえる。この時期の学術界にはイスラーム学と儒学などに精通した多様な文化思想体系の思想家と学者が登場する。イスラームと儒学という二つの文化気質の知識分子を有し、中世期イスラーム思想の文化を基礎とするとともに、中国の儒学、特に宋明儒学の全面的な影響を受けながら、新しい学説体系——「回儒学」が生み出された。「回儒学」は漢語文で布教宣教（イスラーム教—筆者）を主張するとともに、「以儒詮經」（儒をもって經を説く）をより強く主張した。明清時代の代表的学者である王岱輿（及び弟子の伍連城）、張中、馬注、伍遵契、劉智などによる著作も豊富であり、その範囲も非常に広い。その中で馬注は雲南人であったが、他のほとんどは明朝末から清朝初期の江南地方、南京、蘇州を活動の中心としていた。王岱輿と劉智は明朝末から清朝初期に「回儒学」の基礎を確立した重要な人物である。王岱輿は思想運動の目的、任務、内容、形式、道筋を創造的に探索した。また劉智の思想は終始王

岱輿の開拓したイスラーム教及び学説と中国儒学を結びつけるものであった。彼は規範化、洗練化を推し進めることにより、豊かな識別力を表した。劉智から約半世紀の時間が流れた後、雲南地方に馬徳新、馬安礼、馬開科、馬聯元、藍煦（武昌人）など「回儒」思想家が登場する。彼らは王岱輿、馬注、劉智など清朝初期の先人の教えを継承し、「清真釈疑補編」などを書きあげたが、彼らが主に活動していた時代は一九世紀近代の中国である。学術思想上で両者は一貫して似通っているものの、社会背景はそうではない。

三

「回儒学」における「回」という字には、イスラーム宗教、文化、思想などの属性が含まれる。「回」を理解するために、まず「回回」の概念を理解する必要がある。「回教」は「回回」民族信仰宗教の「回回教」に由来するため、略して「回教」と呼ぶことができる。「回回」は蒙元時代のムスリムとして中国でも知られており、「回族」という名称の由来にもなっている。イスラーム教は唐朝時代に大陸内地に伝わり始め、宋、元、明、清の時代を経て発展し続けたので、千年以上の歴史があるといえる。唐朝は大陸におけるイスラーム教の初期段階といえる。この時期の大陸イスラーム社会は一か所一か所のものであり、他と繋がることはなかった。元時代における大陸西北部（この時期は既にイスラーム化していた）の境界は、事実上解放状態にあったため、イスラーム教が大陸で伝播して発展していくのに非常に有利な状況であったといえる。唐の時代とは違い、ムスリムが大陸各地に広がっていき「元時、回回遍天下、及是居甘肅者尚多」（元時代は回回が天下に広がり、甘肅に多く存在した。）といわれるようになり、イスラーム教社会は急激に発展していった。簡単な分析により、「回」という字の誕生したのは「回紇」、「回鶻」、「高昌回鶻」、「回鶻文」、「新回鶻文」.....などの名称と関係があることを理解することができる。特に元朝で採用した「回鶻」（今日ではウイグル民）の政治家、軍事家、学者はモンゴル貴族が金朝と南宋を征服するのを助けるとともに、モンゴル貴族の各種法令制度の制定にも貢献した。これらの歴史が証明しているように、当時は「イスラーム教」がどの種の宗教なのか知られていなかった時代であるものの、「回鶻」民族を全面的に理解していくと、この民族が信奉している宗教は「回教」と呼ばれているものであると考えられる。現在の学者の多くは「回族の祖先」という問題について議論を戦わせている。しかし筆者は、「回回」という名称は「回紇」、「回鶻」と直接的な関係があり、「回教」という文字は「回回教」から変化したものだと考えている。それで「回回教」は回回人の宗教を指しており、「回」民族の形成と変化は「イスラーム教」と同様の関係があると考ええる。仮にイスラーム教が中国に伝わらなければ「回族」という民族も出現することはなかったといえる。また現在の「回族」民族の主要な部分は、海路を渡ってきたアラブ人とペルシャ人の子孫（当然これは一定の比率であるが、占める割合は少ないため、海路移民から回族民族の主体が形成されたというのは歴史的事実に適合しない）ではなく、中央アジアのテュルク民族といえるので、主にモンゴル元時

代に開放された国際的境界とビジネスルートがメインであり、モンゴル人と西夏の間で生じた戦争も大きく関連している。

四

「回儒学」における「儒」という字には、儒教、儒家文化、儒学思想などの分野属性が含まれる。明清王朝から始まった東南ムスリム学者の漢文論著、例えば、王岱輿、劉智などは理学として教義を解釈している。これによりこの分野の学者は理学の影響を受けていった。またこの方法から教義を宣伝するならば多くの人たちが受け入れやすいとも考えるようになった。王岱輿、劉智など「回儒」学者は、家で過ごすときも、日常で労働するときも、私塾で勉強するときも、日々その影響を受けるものと実際に感じる事が主に儒学（特に宋明理学）として代表される儒家文化と考えている。この有形無形、自覚無自覚、直接間接という中において、特に日常生活の交流において接触する簡単で分かりやすい「行動言語」を特徴的な価値概念としている。行動方法、生活習慣などにおける異なる程度、異なる角度が「回儒」学者の精神に対して生涯忘れることのできない印象を残していく。彼らが漢語文を学習していく過程において、儒家思想を主体とする中国伝統文化の影響を避けることはできなかった。そのため、王岱輿、劉智などの「回儒」は少年時代から始まり、儒家思想が早い段階で彼らに影響を与えていたため、彼らの認知結合と品格形成に重要な影響を与えており、その思想の奥深くに儒家思想の烙印が押されていたといえることができる。

明清時代の中国イスラーム思想家は回儒という二文字を同時に用いていたが、その基本的な意味は分けられており、二文字を合わせて一つの名称としたものではない。回と儒は似て非なるものであると主張している。しかしながら、ここにある「真の回とはすなわち真の儒となることである」という一文から、回と儒の二文字を合わせて使うことはしていないが、「回儒」には似たような意味合いがあることが読みとれる。いずれにせよ筆者は「回儒」は一つの名称であり、主に当代研究者が研究していたものであり、明清イスラーム思想家自身を指すものではないと考察している。

多くの実証があるように、王岱輿、劉智などの「回儒」学者思想はイスラーム教、イスラーム神学、イスラーム哲学、イスラーム倫理学、イスラーム政治学を基礎としており、儒家思想を吸収して創造されたものであり、儒家の手本や彼らの思想を吸収したものではない。では、「回儒」と彼らの思想に対して巨大な影響を与えた儒家、特に宋明理学との関係はいったいどのようなものであろうか？一七世紀に明清王朝の南京イスラーム教復興運動（儒教の解釈）が起こった。客観的に考えると、この運動はイスラーム教の中国における生存と発展に寄与したといえる。主観的に考えると、この運動は中国封建社会秩序を擁護するものであったといえる。仮に中国イスラーム教を宇宙本体とする神学上において、儒学とイスラーム教が融合したとするならば、「化儒」が更に多くなる。倫理道德元年状の基本

として中国のものとするのであれば、「化儒」ではなく「儒化」が更に多くなる。仮に宋明儒学と「回儒学」の哲学思想関係という角度から研究するならば、このような結論に到達するのだろうか？

「回儒」学思想体系は中国儒家文化の全面的な影響を受けて発展してきた。「回儒」思想家の漢文翻訳者は一貫してイスラーム教信仰とイスラーム宗教哲学原理を堅持する以外に、儒学、特に宋明儒学を対話の対象としており、その重要なテーマ、範疇、概念を借りるとともに、批判、比較、引用論述を行い、時としてその思想を吸収して取り込むこともしている。また、彼らの学説は二つの基本的な思想を拠り所としている。外来のイスラーム思想、つまり本土の儒学思想をその大きな源としている。明清王朝の「回儒」学説は、イスラームであるとともに儒でもあり、儒であるとともにイスラーム（回であるとともに儒であり、儒であるとともに回でもある）であり、儒とイスラームが合わさった（回儒が合わさった）思想体系であるといえる。

まとめ

「回儒」学者は自身の有しているイスラーム文明と中華文明双方の特徴、双方の文化要素、双方の身分といったイスラーム文明と中華文明の豊富な資源に有機的な統一体を加味し、最も早く文明対話とコミュニケーションを試み、ある程度の成功を収めたといえる。筆者は「文明交流と文明交流の自覚」という中国思想史上に出現した運動により形成された思想体系を「回儒学」と呼び、その更なる体系化を研究していくことを目的としている。「回儒学」学者の思想体系はイスラーム法学、イスラーム教義学、イスラーム哲学、倫理学、政治学などを基礎として、儒家思想の批評を吸収し、宋明儒学から創造されたものである。「回儒学」学説体系の創立は、世界イスラーム思想文化発展史への貢献だけでなく、文明の多様化にも貢献している。理論と実際の価値、意義から論じると、「回儒学」は儒家文化とイスラーム文化を十分に裏付けるとともに、この世界二大文化には密接な関係があることを明らかにしている。

